

ホオズキ新品種 ‘佐賀H5号’ は、密植栽培と摘心で安定生産

【 花き研究担当：45-2143 】

ホオズキは本県の主要な夏場の特産花きの一つであり、主にお墓の供え物として切り枝が利用されています。本県はこれまでに切り枝用の品種として ‘佐賀H5号’ を育成し、平成27年に品種登録出願公表されました。そこで今回、生産性および品質の向上を目指して、‘佐賀H5号’ に適した栽培方法を検討しました。

①生産性向上のための ‘佐賀H5号’ に適した栽植密度の検討

‘佐賀H5号’ は、実着きが良いことから、栽植密度を上げることで生産性が向上することが期待されます。そこで、慣行の2倍または1.5倍の栽植密度で栽培し、慣行との比較を行いました。その結果、初期の生育が促進され、収穫時の切り枝長が長くなり、宿存がくの着生数も確保できました（図1）。中でも、1.5倍密植区において着生数が多かったことから、‘佐賀H5号’ は慣行の1.5倍の密植栽培により、品質を維持したまま生産性を向上できることが明らかとなりました。

②品質向上のための ‘佐賀H5号’ に適した摘心時期の検討

本県では、切り枝上部の宿存がくのボリュームアップを目的に、収穫前に摘心することを推進しています。そこで、収穫2週間前または3週間前に摘心を行い、摘心をしない場合と比較して ‘佐賀H5号’ に適した摘心時期を検討しました。その結果、摘心することで切り枝上部の宿存がくが肥大し、ボリュームの向上につながりました（表1）。中でも、収穫2週間前に摘心を行うことで、切り枝長と宿存がく数が無摘心の場合と同程度を維持できたことから（図2）、‘佐賀H5号’ では、収穫2週間前に摘心することで、上位部のボリュームアップによる品質向上につながることが明らかとなりました。

今後はこれらの試験結果も踏まえて ‘佐賀H5号’ の栽培指針を作成し、県内での生産拡大に向けて取り組んでいきます。

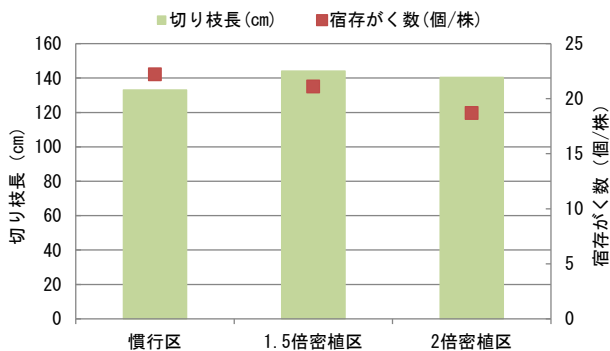


図1 栽植密度による切り枝長と宿存がく数の違い

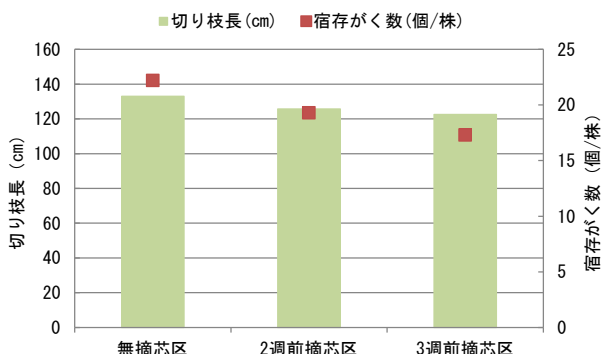


図2 摘心時期による切り枝長と宿存がく数の違い



写真1 ‘佐賀H5号’ の圃場での様子（左）と全体像（右）

表1 摘心時期による宿存がくの大きさの違い

試験区	縦径 (mm)	横径 (mm)
無摘心区	40.7	25.2
2週間前摘心区	41.8	31.5
3週間前摘心区	41.6	34.0

研究成果の紹介

イチゴ害虫ナミハダニの殺ダニ剤に対する感受性の低下がみられます

【 病害虫・有機研究担当:45-8808 】

野菜・花き類に寄生するナミハダニ(図1)は、殺ダニ剤に対する感受性の低下、つまり薬剤の防除効果の低下が早く、難防除害虫の一つです。近年、本種が施設イチゴで多発することから、県内10ほ場で採集したナミハダニの殺ダニ剤に対する感受性を検定しました(表1)。その結果は①~③のとおりです。

- ①ダブルフェースフロアブルは比較的感受性が高い(但し、ほ場によっては低い)。
- ②マイトコーネフロアブル、スターマイトフロアブルは半数以上のほ場で感受性が低い。
- ③ダニサラバフロアブルは大部分のほ場で感受性が低い。

このように、ナミハダニの殺ダニ剤に対する感受性の著しい低下(防除効果が低い)が明らかとなり、このことが多発要因の一つと考えられました。

これらのことから、薬剤のみでのナミハダニ防除は非常に困難なので、**生物農薬(天敵カブリダニ類等)**や抵抗性が発達しにくい**気門封鎖型の薬剤**を組み合わせた**総合防除体系**に取り組みましょう。

表1 県内各地のイチゴほ場(本ほ)で採集したナミハダニの各種殺ダニ剤に対する感受性^{a)}
補正死亡率(%)

採集地	ダブルフェース フロアブル	マイトコーネ フロアブル	スターマイト フロアブル	ダニサラバ フロアブル
	6000倍	3000倍	6000倍	3000倍
A	62	87	82	1
B	82	60	48	8
C	95	— ^{b)}	90	21
D	100	65	100	—
E	27	33	59	0
F	70	85	73	0
G	83	69	77	5
H	62	37	68	19
I	100	83	0	100
J	97	97	85	3

a) 常用濃度の1/3希釈薬液で検定。補正死亡率を算出し、80%未満で「感受性が低い」と判定した。
b) —:産卵数が少なくサンプル数不足のために未実施。

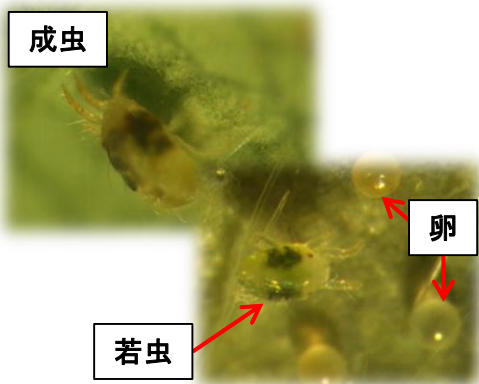


図1 ナミハダニの成虫・若虫・卵

富士町で冬どりタマネギを作ると10月下旬から収穫できました

【 山間畑作研究担当:56-2040 】

佐賀市富士町上無津呂地区(圃場面積500m²)で佐城農業改良普及センターと連携し、子球を利用した冬どりタマネギの現地実証試験を行いました。場内試験の結果と同様に、標高400mの中山間地でも栽培が可能で、平坦部より2週間早い10月下旬から収穫できました。収量は4.2t/10a、市場での取引価格は130円(S規格)~270円(L規格)/kgでした。「来年は子球の育成から取り組んでみたい。」という農家の声もあり、今後の普及・定着が期待されます。



9月下旬の生育状況



収穫状況(10月下旬)

【農と食のふれあい祭りを開催しました】

11月11日に一般公開デー「農と食のふれあい祭り」を、農業防除技術センターと佐城農業改良普及センターとの合同で開催しました。それぞれの機関の活動の紹介と成果を、また営農相談コーナーでは家庭菜園を含めた相談にも応じました。

早どりのイチゴやタマネギなどの農産物の販売や新品種候補のお米の試食は好評で、有害鳥獣として捕獲されたイノシシ料理の試食も好評で準備した200食はすぐにお腹の中に入りました。収穫した稲をお米にする、脱穀や搗精などの体験もお子さんだけでなく大人の方にも楽しんでいただけました。一方、天気は晴れでしたが、風が強く残念ながらバルーンの係留飛行は中止となってしまいました。

楽しんでいただくだけでなく、パネルやビデオでの試験成果の説明や、試験実施中のハウスの説明・案内も行いました。

来年も実施しますので、是非ご来訪ください。



野菜の販売



ハウスの案内風景

【九州沖縄地域マッチングフォーラムが佐賀県において開催されました】

平成29年度の九州沖縄地域マッチングフォーラムが佐賀市アバンセで開催されました。「九州地域水田輪作体系での革新技術」をテーマに行われ、佐賀県からも「大豆の不耕起播種」(秀島係長)と「ビール大麦の品質向上」(岩城技師)で発表しました。平成30年産から米(主食用)の交付金が廃止されることなどから、水稻の収穫時期にもかかわらず農家の参加も多く、総勢170人を超える参加があり、関心の高さがうかがわれました。



秀島係長



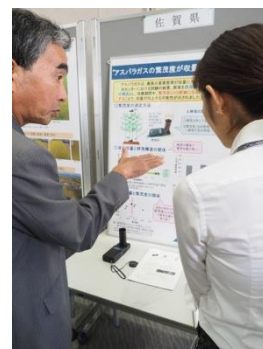
岩城副主査



研究成果発表会



閉会挨拶をする
田崎所長



研究成果の紹介

【九州雑草防除研究会(日本雑草学会九州支部)第75回例会が佐賀県において開催されました】

九州雑草防除研究会第75回例会が2017年7月25日(火)および26日(水)に佐賀市内にて開催されました。両日あわせて総勢135名が参加しました。25日午後の現地検討会では、三瀬分場で実施している水稻用除草剤適2試験および除草ロボットを視察しました。あいにく視察中に急な土砂降りとなったため、十分な視察時間を取ることができませんでしたが、参加者それぞれ目的とする試験薬剤の視察はできたようでした。その後、川副町の本場に移動し、水稻用除草剤適2試験を視察しました。翌26日午前には「グランデはがくれ」で講演会が行われました。全部で9課題の講演が行われましたが、うち佐賀県からは、3課題(農技防:徳田真二、農試:秀島好知、西松浦普及:市丸喜久)が発表されました。なお、講演内容は「九州の雑草第47号」に収録される予定となっています。

さらに、例会に引き続き、同会場において「平成29年度水稻関係除草剤試験成績中間検討会」も開催されました。



現地検討会(本場)



講演会(グランデはがくれ)

新稲作研究会中間検討会で タマネギ直播栽培を検討

【露地野菜研究担当:0952-84-5169】

全国で農業機械化技術の開発、普及を図っている新稲作研究会の中間検討会が10月18日に佐賀県で開催され、関係者約100名が参加しました。

午前には佐賀市で中間成績検討が行われ、白石分場で取り組んでいる「タマネギのトラクタ用直播栽培用播種機の実証試験」を始めとして全国で実施している技術課題について発表と意見交換が行われました。

午後からはタマネギ栽培が盛んな白石町に移動し、白石分場においてはタマネギ直播用播種機や圃場での直播タマネギの生育状況についての説明が行われました。さらに、JAさが白石地区育苗センターではタマネギ等苗の生産状況の見学が行われました。



図1 タマネギ畝立同時
直播播種

図2 直播用播種機の説明

土壌肥料研究担当の紹介

土壌・肥料研究担当では、県内の定点圃場での地力の変遷調査や、場内での有機物連用試験等を通して土づくりや土壌改良、米・麦・大豆の施肥や肥培管理、野菜・花きの栄養診断や肥培管理等に関する技術開発を行っています。

近年、農家所得向上のため、更なる生産費（生産資材費）の削減や省力化が求められており、米麦や野菜における土壌中の残存量に基づくリン酸やカリの減肥や、緩効性肥料による施肥の省力化等の試験を実施してきました。

作物の高品質安定生産のためには、土壌や肥料はその基盤となるものであり、今後とも土づくりによる地力の維持増進、肥料の効率的な施用による生産コスト節減に取り組んでまいります。



ドローン・アシストスーツを体験しました

企画調整 八田 聡

去る11/1に農林水産研修所つくば館水戸ほ場において、新技術農業機械化推進研修「精密農業・自動化ハイテクコース（ドローン、アシストスーツ）」を受講しました。昨今のICT技術の発展を受け、今年度からドローンを利用したリモートセンシングが新設され、防除用ドローンの操作を体験しました。

また、2日目は2種類のアシストスーツ（HAL®, マッスルスーツ®）を試着し、今後の農業への利活用の可能性を肌で感じました。



4種類のドローンを体験

マッスルスーツを
試着する筆者

インターンシップ受入れ

8月に城南中学校から4名、成章中学校から4名の生徒さんを本場へ、また白石中学校から2名の生徒さんを白石分場へ職業体験研修として受け入れました。暑い中でしたが、農作業や調査の手伝いなど、農業にふれる貴重な体験をしてもらえたのではないかと思います。

発行所

佐賀県農業試験研究センター
（企画調整部 企画調整研究担当）
〒840-2205 佐賀県佐賀市川副町南里1088
TEL 0952-45-2142
FAX 0952-45-8801
E-mail nougyoushikensenta@pref.saga.lg.jp

佐賀県農業試験研究センター

検索

当ニュース記事を利用される場合は、御一報ください。